フィールド（現場）からの風 ㉕⑥

宮田守男

地域保全に大切な集落活動を継続させる知恵の必要性を考えることが大切だ

9月下旬の早朝、私の住む白馬村森上地区で9班に分かれて区内全域の草刈作業を中心とした美化清掃が行われた。年2回実施する作業は毎年担当区域を変更しながらの実施方法で、区民全員が区内の実情を知る良い機会でもある。年々参加者の減少傾向や、草刈機作業ではなくゴミかき持参での参加も増え高齢化等の影響を感ずる時でもある。だが、この作業の連続が地域連帯の絆を確かなものにし、きれいな集落の雰囲気を持続させていることは確かだ。

9月上旬に知人の白大学社会学部地域社会学科助教授の山口晋さんを案内して、長野オリンピック会場地の現在の状況を巡る機会があった。目的は、2020年東京オリンピックの大きな課題である跡地問題を研究するためだ。白馬ジャンプ競技場・スノーハープクロスカントリー競技場・アルペン会場の国際スキー場も活気あふれる状況ではなかった。だが、施設管理面では、荒廃している姿ではなく、すさんでもいない雰囲気をぜひ見てほしいと助言した。自家用車の車窓からの村の風景も、「想像していたより穏やかさを感ずる」との感想はうれしい限りだった。白馬村内の美化活動や植栽活動などの集落活動の継続性の大切さを改めて感じた機会でもあった。

オリンピック開催から20年を迎える白馬について尋ねられ、「世界的な視野で物事を考えられる人材が育った。外国人旅行者の視点で地域がどうあるべきか前向きな行動が見られる」と答えると、予想していた課題ではない答えに深い関心を寄せた。若者や外国人が定住し、村内での話題も多い、東京オリンピック開催で、「開催地のその後」に注目が集まる絶好のチャンスと捉えなくては、と考えさせられた。

元スキージャーナル・グラフィック編集長の藤井好直さん。自宅にて亡くなっていたことを聞き心が痛む。死に際は穏やかだったと思いたい。スキージャーナルは月刊誌のスキー専門誌で藤井さんの記事は、いつも危機感を持ってスキー界に一家言（いっかげん）を投じ続けた名物編集長、引退後は白馬に移り住んだ。厳しく指摘することで敵も多かったが、愚直な性格は嫌いではなく、みそら野の自宅を訪ねては2人でよく酒を酌み交わした。スキー関係者に「スキースポーツの再生を担うのはあなただ」の口癖は忘れることはないだろう。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

集落内の美化活動に取り組む区民活動の今後が年々心配になってきている